水都大阪 2009 協賛　夕陽さんさんの会　2009. 9. 21.　K. K.

# 夕陽、近松、千昌夫

## １．中之島の夕陽

堂島川　－　　玉江橋、田蓑橋、渡辺橋
土佐堀川　－　常安橋、筑前橋、肥後橋

## ２．近松心中物語

近松門左衛門（1653～1724）　＝　杉森信盛

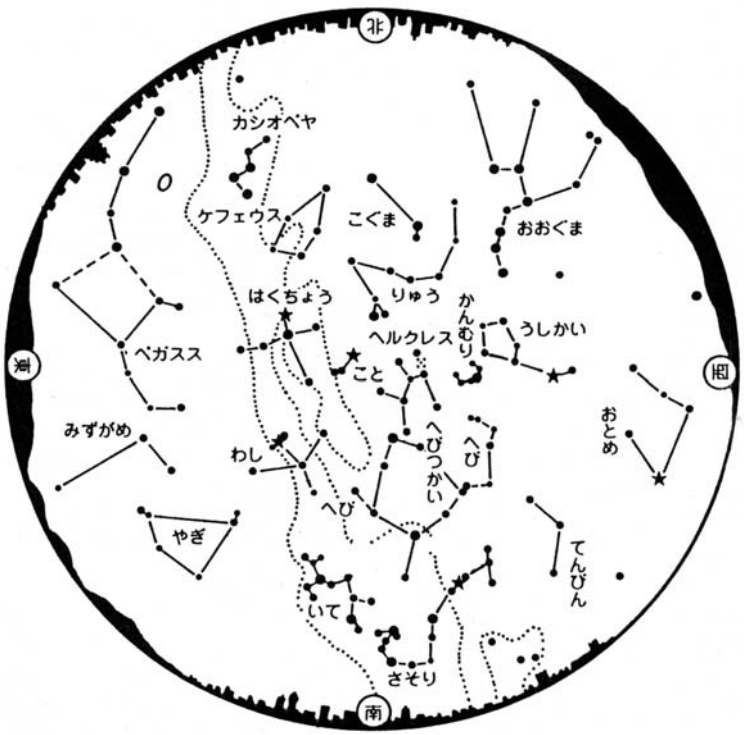
| | |
|---|---|
| １６５３年（承応２） | 近松、福井で出生。1655、父とともに現在の鯖江市に移住 |
| １６６７年（寛文７） | 父が浪人し、京都へ移り住む |
| １６８３年（天和３） | 「世継曽我」上演（劇作家として世に認められた最初の作品） |
| １７０３年（元禄 16） | 「曽根崎心中」上演（最初の世話物） |
| １７０６年（宝永３） | 京都から大阪に移り住む |
| １７１１年（正徳元） | 「冥途の飛脚」上演 |
| １７１５年（正徳５） | 「国性爺合戦」上演 |
| １７１６年（享保元） | 近松の母没。広済寺で法要 |
| １７２０年（享保５） | 「心中天網島」上演 |
| １７２１年（享保６） | 「女殺油地獄」上演 |
| １７２４年（享保９） | 1 月「関八州繋馬」上演（絶筆）１１月２２日、近松没（72 歳） |

**・曽根崎心中**（元禄 16 年 4 月 7 日（1703 年 5 月 22 日）早朝に大阪堂島新地天満屋の女郎・はつ（21 歳）と内本町醤油商平野屋の手代である徳兵衛（25 歳）が梅田・曽根崎の露天神の森で情死した事件）
**・冥土の飛脚**（1711、飛脚問屋の養子忠兵衛が遊女梅川となじみ、身請け金をめぐって、のっぴきならぬ状況に追い込まれて、ついに公金の封印切り。親里の新口村（にのくちむら）まで逃げるが、捕まるという話。）
**・心中天の網島**（1720、紙屋治兵衛と遊女小春、女房おさん、『河庄』と『時雨の炬燵』）

### ＜曽根崎心中、天神森の段＞　このセリフは近松原作を改作

この世の名残り、夜も名残り。
死に行く身をたとふればあだしが原の道の霜。
一足づつに消えて行く夢の夢こそ哀れなれ。
あれ数ふれば暁の、七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の、金の響きの聞き納め。寂滅為楽(じゃくめついらく)と響くなり。
鐘ばかりかは、草も木も空も名残りと見上ぐれば、雲心なき水の面北斗は冴えて影うつる星の妹背の天の河。
梅田の橋を鵲(かささぎ)の橋と契りていつまでも、われとそなたは女夫星。

必ず添ふとすがり寄り、二人がなかに降る涙、河の水嵩(みかさ)も勝るべし。
心も空も影暗く、風しん／＼と更くる夜を、星が飛びしか稲妻か、死に行く身に気も冷えて、
「アヽ怖は。いまのはなんの光ぞや」
「オヽあれこそは人魂よ。あはれ悲しやいま見しは、二つ連れ飛ぶ人魂よ。まさしうそなたとわしの魂」
「そんなら二人の魂か。はやお互は死にし身か。死んでも二人は一緒ぞ」
と抱き寄せ肌を寄せ、この世の名残りぞ哀れなる。
初は涙を押しぬぐひ、
「ほんに思へば昨日まで、今年の心中善し悪しをよそにいひしが、今日よりはお前もわしも噂の数。まことに今年はこなさんも二十五の厄の年、わしも十九の厄年とて、思ひ合ふたる厄祟り、縁の深さの印かや。未来は一つ蓮(はちす)ぞ」
とうちもたれてぞ泣きゐたる。
徳兵衛、初が手を取りて、
「いつはさもあれこの夜半は、せめてしばしば長からで、心も夏の短夜の、明けなばそなたともろともに浮名の種の草双紙。笑はば笑へ口さがを、なに憎まうぞ悔やまうぞ。人には知らじわが心。望みのとほりそなたとともに一緒に死ぬるこのうれしさ。冥途にござる父母にそなたを会はせ嫁姑、必ず添ふ」
と抱きしむれば、初はうれしさ限りなく、
「エヽありがたい忝い。でもこなさんは羨ましい。わしが父さん母さんはまめでこの世の人なれば、いつ逢ふことの情けなや、初が心中取沙汰をあすは定めて聞くであろ、せめて心が通ふなら夢になりとも見て下され。これからこの世の暇乞ひ、懐しの母さまや、名残り惜しやの父さまや」
と声も惜しまずむせび泣き。
「いつまでかくてあるべきぞ。死におくれては恥の恥。いまが最期ぞ。観念」
と脇差するりと抜放し、馴染み重ねて幾年月いとし可愛としめて寝し、いまこの肌にこの刃と思へば弱る切先に、女は目を閉ぢ悪びれず、
「はやう殺して殺して」
と覚悟の顔の美しさ。
哀れをさそふ晨朝(じんちょう)の、寺の念仏の切回向。
『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』
を迎へにて、哀れこの世の暇乞。
長き夢路を曾根崎の、森の雫と散りにけり。




元禄 16 年 4 月 7 日（1703 年 5 月 22 日）早朝の星空

## ３．千昌夫（1947-）の「夕焼け雲」（1976）

五木寛之氏（1932-）　-　「蓮如」、「21 世紀仏教への旅」など

歌手：千昌夫
作詞：横井弘
作曲：一代のぼる

夕焼け雲に　誘われて
別の橋を越えてきた　帰らない
花が咲くまで帰らない　帰らない
誓いのあとの　せつなさが
杏の幹に　残る町

二人の家の　白壁が
ならんで浮かぶ堀の水　忘れない
どこえ行っても忘れない　忘れない
小指でとかす　黒髪の
かおりに甘く　揺れた町

あれから春が　また秋が
流れていまは遠い町　帰れない
帰りたいけど帰れない　帰れない
夕焼け雲の　その下で
ひとりの酒に　偲ぶ町

横井弘（1926-）
伊藤久男『あざみの歌』（1951 年）、
三橋美智也『哀愁列車』（1956 年）、『達者でナ』（1960 年）、
倍賞千恵子『下町の太陽』（1962 年）、『さよならはダンスのあとに』（1965 年）、
仲宗根美樹『川は流れる』（1961 年）、
中村晃子『虹色の湖』（1967 年）